

# センターニュース

Hokkaido University  
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター  
Newsletter No. 80



カナダ・ダルハウジー大学と交流協定 (3 ページ)

特集：国際シンポジウム，アカデミックライティング，マイクロ  
ロテーティング，ライデン大学 FD プログラム (4 ページ)

北海道大学教育倫理綱領および科学者の行動規範 (17 ページ)

国公立 4 大学 IR ネットワーク (18 ページ)

次世代 FD 研究会ワークショップ (23 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

## 巻頭言 FOREWORD

### 入学者選抜研究部長をお引受けして

入学者選抜研究部長 喜多村 昇

本年4月1日付で高等教育機能開発総合センターの入学者選抜研究部長をお引き受けいたしました。はじめに、本年3月末まで研究部長を務められました大学院先端生命科学研究院名誉教授の加茂直樹先生に心より御礼申し上げますとともに、研究部に対する長年に亘るご尽力に敬意を表します。入学者選抜に関わる私の知識と経験は加茂前研究部長と比べるもなく、この職を十分に務められるかどうか甚だ心もとない限りですが、お引受けした以上、微力ながら本職に邁進致しますので何卒宜しくお願い致します。

私がセンターの入学者選抜研究部長のご指名を受けるに至った経緯は定かではありませんが、私が所属する理学部化学科が平成12年度入試から推薦

入試を、平成13年度入試からAO入試を開始したことに端を発しているのだろうと想像しています。推薦・AO入試を開始するにあたり、理学部化学科では化学に強い興味と意欲を持ち、将来は大学院に進学して研究者の道を希望する学生を多く集めることができるよう、教員が手分けして道内・道外の高校訪問を行ってきました。また、平成11年度から毎年8月に「受験生のための化学科研究室公開」を開催しており、現在まで、私がお世話させてい

ただいています。本学の入学者相談委員を仰せつかった時期には、東京、横浜、名古屋などでの北大説明会に参加させていただき、高校生への理系学部の説明を担当させていただきました。さらに、平成20年度の入学者選抜においては入試総務委員長という大役を仰せつかり、大雪による前期日程試験の1日延期という、大変な決断をするという経験を致しました。

このように、この10年ほど、何らかの形で入学者選抜に関わってきたことは事実ですが、入学者選抜研究部長を仰せつかるほどの知識や経験がある訳では無く、自分自身で頼りなく思うところです。ただ、上で述べた「研究室公開」や札幌近郊の3つの高校とのサイエンスパートナーシッププログラムなどで高校生と一緒に実験をしたり、北海道の高文連理科研究発表会の審査員を仰せつかったりと、高校生と直接話す機会は一年を通して度々あります。このような機会を利用して高校生や高校の先生方の意見や思いを聞き、入学者選抜に反映できればと思っております。知識不足の分を現場レベルから補うことができれば幸いかと思います。

さて、入学者選抜研究部においては、AO入試や大学入試問題等に関する研究会の開催、入学者選抜に関する各種の研究・調査、道内外の高校訪問や北大進学説明会における説明員を含めた北大入試広報等、多岐にわたる活動を行っています。

平成23年度入試から本学では「総合入試」が開始されることになっており、その為のさまざまな準備が進んでいます。当研究部と致しましても「文系・

理系総合入試」におけるアドミッションポリシーの原案を作成するとともに、学部別入試のアドミッションポリシーの集約を求められています。さらに、「総合入試」に関するさまざまな広報が必要であることは言うまでもありません。

本年度の研究部におきましては、函館(8月30日)、北見(10月10日)における北大セミナーの開催や、名古屋(10月31日)、大阪(11月1日)、東京(11月3日)で開催される北大進学説明会への入試相談員として参加します。また、道内外の多くの高校訪問を行い、総合入試の広報を積極的に行う事を予定しており、一部は既に実施済みとなっております。

入試改革の前後における志願者の動向の変化や入学者の志望動機、進路選択等に関する意識変化についてのきめ細かい情報収集も必要になります。「総合入試」は本学にとって大きな入試制度改革であり、これをスムーズに行う社会的責任があるとともに、この入試改革により、北大の教育体制の質の向上が伴わなければなりません。これらの関連するさまざまな情報収集とその調査・分析を継続的に行う必要があります。これを更なる入試制度の改善につなげる事が望まれます。

これらの事を考えると、入学者選抜研究部員のみでは力不足の面も多々あるかと思えます。本学の入試や教育体制の改善のため、研究部の活動にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

(理学研究院 教授)



カット：氏間多伊子

## カナダ・ダルハウジー大学と大学間交流協定を締結

7月30日(木)、カナダのダルハウジー大学との学術交流に関する協定の調印が行われました。調印式には、ダルハウジー大学から Susan Spence Wach 副学長補佐、本学から佐伯総長、脇田副学長、望月文学研究科長ら6名が出席しました。

ダルハウジー大学は1818年に設立されたカナダ東海岸のノバスコシア州にある大学で、工学、理学、経営学、法学など10の学部からなり、学生数は約15,000人、教員は約1,000人を数えます。本学と

ダルハウジー大学は、特に海洋分野や教育開発分野で活発な交流を行ってきました。

これまでの交流実績を踏まえ、全学的な交流に発展させるために、このたび本センターが責任部局となり、文学研究科、水産科学研究院および北方生物圏フィールド科学センターを関係部局として、ダルハウジー大学との大学間交流協定が締結されました。今後も両大学の交流が活発に行われることが期待されます。(安藤厚)

写真1 ワック副学長補佐から佐伯総長へ記念品贈呈

写真2 調印式後の記念写真

前列左から、ワック副学長補佐、佐伯総長

後列左から、安藤高等教育開発研究部長、望月文学研究科長、本堂副学長、

脇田副学長(センター長)、林副理事・学術国際部長

## 国際シンポジウム 「プロフェッショナル・ディベロップメントの諸相」を開催

北海道大学と筑波大学共催の国際シンポジウム「高等教育におけるプロフェッショナル・ディベロップメント」のプログラムAが7月27日(月)と28日(火)に筑波大学で開催され、つづいて、プログラムB(札幌)として、国際シンポジウム「プロフェッショナル・ディベロップメントの諸相」が、7月30日(木)と31日(金)に本学情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室で開催されました。

北大のシンポジウムには、講演者(海外から7名、国内から4名のゲスト)および本学・筑波大学関係教職員29名のほか、全国から2日間でのべ約100名の参加がありました。

当日は、脇田センター長の挨拶の後、国内外各大学からのゲストにより英語で講演が行われました。両日を通して同時通訳を配し、パネルディスカッションでは活発に意見交換が行われました。

第1日目の講演終了後には、情報交換会(Welcome Party)が開催され、講師ら35名が参加し、貴重な情報交換の場となりました。

プログラム概要は、センターニュース前号(79号)をご覧ください(サンフランシスコ州立大学のパメラ・ヴォーグ氏は、発表取りやめとなりました)。

講演では、FD、TA研修、次世代教員養成(PFF)、スタッフ支援プログラムなど、プロフェッショナル・ディベロップメントの最前線でのさまざまな取り組みが紹介されました。討論では、文化・伝統に発するさまざまな困難も指摘されましたが、各国の取り

組みが共通の課題をもってほぼ同時並行で進んでいることが確認できました。UCバークレー校のフォンヘーネ先生、ソラッコ先生からは「ワークショップでの学生の反応の良さには驚いた」「筑波大、北大のワークショップや講演会を通じて出された質問や意見、あるいは反感、疑惑の意見などが、私たちが過去10年、20年で行なってきたことに対して寄せられた質問、意見、反論、疑惑とあまりにも似ていたので驚いた」との感想が寄せられました。

プログラムA(つくば)のなかで開催された国際ワークショップ「若手研究者のためのプロフェッショナル・ディベロップメント」(27日)には、北大から留学生多数を含む約15名の大学院生が参加し、フォンヘーネ先生、ソラッコ先生から「TAを活用した成績評価基準の作り方と使い方」あるいは「研究成果を発信するためのアカデミックライティング実践」の指導を受け、貴重な経験を積みました。

北大のシンポジウム最後のクリッカーを使ったアンケートによれば、回答者54人のうち、国籍は、日本40人、アジア7人、北米5人、大学での職務は、教員30人、職員13人、学生11人、興味をもったテーマは、Academic Writing 28人、Preparing Future Faculty 21人、Microteaching 17人、訪問したい大学は、ワシントン大学26人、UCバークレー校24人、ダルハウジー大学23人などでした。

シンポジウムの最後には、以下のような両大学副学長によるまとめが確認されました。(安藤厚)

筑波大学・北海道大学共催 2009 年度国際シンポジウム  
 ≪ 高等教育におけるプロフェッショナル・ディベロップメント ≫ のまとめ

筑波大学副学長 清水 一彦  
 北海道大学副学長 脇田 稔

シンポジウムにおいてわれわれは、高等教育の質の向上のため、プロフェッショナル・ディベロップメント (PD) 推進の方策について討論し、以下のような目標を提起し、その実現の必要性を確認した。

1. わが国の大学の FD 活動を, TA 研修, 次世代教員養成 (PFF) およびスタッフ支援プログラムを含む, プロフェッショナル・ディベロップメントというより広い一体的なアプローチとしてとらえること。
2. データに基づいた教育改善と質保証をさらに推進すること。
3. 両大学において, 能動的学習, 混成型 e-ラーニング, ラーニングマネジメントシステム, マイクロティーチング, ティーチング/ラーニング・ポートフォリオなどの手法を研究・活用すること。

さらに, PD プログラムを推進するため, 両大学が全国的なネットワークの形成・普及に重要な役割を果たすことを提言する。

2009 年 7 月 31 日, 札幌

写真 3 Welcome Party (札幌アспенホテル) にて

前列左から, シ・ジンファン (清華大), ジュディス・A・オーメット (インディアナ大), スーザン・ワック (ダルハウジー大), リン・テイラー (同), ジョディ・D・ナイキスト (ワシントン大), イ・ヘジュン (ソウル国立大学), リンダ・フォンヘーネ (カリフォルニア大バークレー校), サブリナ・ソラッコ (同)

中列左から, 町井輝久 (北大), 吉永契一郎 (東京農工大), 山田礼子 (同志社大), 石田東生 (筑波大), 宮本陽一郎 (同), 安藤厚 (北大), 脇田稔 (同), 山岸みどり (同), 西森敏之 (同), 阿部和厚 (北海道医療大)

後列左から, 細川敏幸 (北大), 河内真美 (筑波大), トム・ガリー (東大駒場), 瀬名波栄潤 (北大), 山田邦雅 (同), 小笠原正明 (筑波大) (敬称略)

## 国際シンポジウム・ワークショップに参加して ～アカデミックライティングの新展開～

文学研究科・准教授 瀬名波 栄潤

国際交流室が現在検討しているアカデミックサポートの一つ、ライティングラボ設置準備作業部会の一員として、アカデミックライティングに強い関心を持ってこの国際シンポジウムに参加しました。高等教育機能開発総合センターの先見性の高い企画に感謝すると同時に、本学でも早急にアカデミックライティングのサービスを提供しなければならないと感じました。

筑波大学では、まずカリフォルニア大学バークレー校アカデミックサービス部長のソラッコ氏が同サービス部の仕事の内容を紹介しました。そこは将来「よい教え手」になるための院生教員対象の教授法教育に加えて、「よい書き手」として自立した研究者になるためのライティングの指導を併置した特色あるプログラムを提供しています。アカデミックライティングでは、課題論文や学位論文だけでなく、外部資金申請書の書き方なども指導します。

その後、ソラッコ氏はワークショップ「研究成果を発信するためのアカデミックライティング実践」を30名ほどの大学院生を対象に行いました。1分間で論文の主旨を言い切る「エレベーターピッチ」の訓練は印象的でした。本学からは15人ほどの大学院生が参加し、留学生・日本人学生、男女、理系・文系の比はそれぞれほぼ同じで、プログラムの感触を得るには理想的な構成でした。受講後の反応には、「バークレー校のシステムを導入すべき」「北大もアカデミックラ

イティングの授業やワークショップを提供してほしい」など、本学にアカデミックライティングのサービス提供を促すものから「大学教員になるにはアメリカの大学院が最善」という悲観的なものまでありました。

札幌でのディスカッション「日本と米国におけるアカデミックライティング」では、ソラッコ氏と私に、筑波大の宮本陽一郎氏と東京大のトム・ガリー氏が加わり、日本におけるアカデミックライティングやライティングセンターの役割が、ネイティブチェックを行う添削センターから、多少の文法ミスには目をつむり、理論構成のしっかりした論文執筆を教授する方向へと転換しつつあることが報告されました。バークレー校のアカデミックライティングプログラムが、今の日本の大学が目指す方向であることが見えてきました。シンポジウム終了後、よりよいアカデミックライティングプログラム構築へ4大学が協働することを誓い合いました。

本学にアカデミックライティング・プログラムを設置することは、北大の教育の国際化のために不可欠の急務です。留学生も日本人学生も切望しています。その実現には国際交流室と教育改革室の協働とリーダーシップが必要です。ちなみに、シンポジウム終了から一ヶ月後、東京大のアカデミックライティング教員グループはバークレー校視察へ旅立ちました。

写真1 ソラッコ氏のアカデミックライティング・ワークショップ風景

## 英語による授業に関する FD プロジェクト

今年度、国際企画課国際教育連携支援チームは高等教育機能開発総合センターとの共催で、英語で授業を行う教員向けのサポートプログラムの開発に取り組んでいます。

### 文学研究科向け英語による授業に関する FD プログラム

これから英語による授業を増やしていく初期段階の研究科向けに、汎用性のあるプログラムの先行モデルを作ることを目的として6名の教員が参加し、6月から2月まで全6回のワークショップを開催します。デモレッスンとピアレビュー、英語での授業に関連したテーマについてのディスカッションを行い、他の教員との積極的な意見交換を通して実践的なスキルアップを目指します。

### マイクロティーチング・ワークショップ

文学研究科向け FD プログラム開発の一環として、7月29日には4名の教員対象にナイキスト教授（ワシントン大学教育開発研究センター名誉センター長）によるマイクロティーチング・ワークショップを行いました。各自4分間行うデモレッ

スンでは、苦手意識を感じていることに敢えて挑戦し、ビデオ録画をその場で再生して自分の授業の様子を見ました。次に、建設的なフィードバック (constructive feedback) では、まずは授業でうまくいった部分についてコメントしあい、お互いの良い点から学ぶ姿勢を大切に、その後の改善点についてのコメントも批判的になることは避け、具体例を提示することを心掛けました。参加者は、今後広く学内で実施するメリットを体感しました。

### ライデン大学 FD プログラム

オランダ・ライデン大学の協力を得て、8月24～28日ライデン大学及びデルフト工科大学で開講され、本学9部局より15名の教員が受講しました。

1999年に採択されたボローニャ宣言の後、EU内で学生移動が活発化した影響を受け、ライデン大学及びデルフト工科大学をはじめオランダの大学では、2005年頃より大部分の大学院教育を英語で行うことになりました。まず段階的なスケジュールで改革が進められた様子や、課題と対応策などについて具体例が提示され、国際化を進める上での戦略や方針の重要性について説明を受けました。次に、非





ングは楽しいものだということがわかってもらえれば、広く実施できると思います。高機能センターを中心に、学内に広げていってはどうでしょうか。

- 4) ご本人は謙遜していらっしゃるようですが、ナイキスト先生のファシリテーションはすばらしいものでした。ご本人の経験のたまものだと思います。参加者を威圧することなく、具体的な改善点を理解させていく技法はさすがです。北大で実施するさいに成否を分けるのはファシリテーターの技術だと思います。

#### 文学研究科・村松正隆（倫理学）

- 1) 具体的に「これ」というものを学んだとは言わないが、「大切な心構え」とでも言うべきことを意識できるようになった。Nyquist 先生が、「学生が何を学ぶか」が大事である、と繰り返されていたのが印象的であった。また、同僚の授業を見るときも、まずは積極的な姿勢で臨むことの重要性がよく意識できた。
- 2) ありました。“Do you have any questions?”ではなく“What are your questions?”と尋ねる、というのは、日本語だとどう言えばいいか、すぐにはわかりませんが、試してみようと思います。
- 3) 申し訳ないですが、質問の趣旨がよくわかりません。「誰が」「活かす」のでしょうか。「私が」であれば、それは「活かせると思う」と答えまし、他の先生たちも」という意味であれば、それは「他の先生たち次第」ということになります。もっとも今日の方法を北大の有志でやっ

てみたらどうか、という意味であれば、それはそれで有意義なことと思います。

- 4) お忙しい中この時間をとってくださった Nyquist 先生をはじめ、山岸先生、スタッフのみなさまに深く感謝しています。なお、自分の授業のビデオ撮りは、苦痛に耐える根性さえ身につけば（笑）、大変有効な方法だと思います。

#### 文学研究科・眞嶋俊造（応用倫理研究教育センター）

- 1) 得ました。（自分の模擬授業の様子をビデオで見ることで、ピアレビュー）
- 2) ありました。（リラックスして、学生も自分もより快適になるようにしていく必要があるかなあと感じました。）
- 3) あると思います。（ビデオ FD）

#### 文学研究科・中村三春（映像・表現文化論）

- 1) 講師および参加者とのディスカッションを通して、建設的な授業改善の方策を考案することができた。自分の授業風景をビデオで確認して、実際に問題点や課題を認識することができた。
- 2) 双方向的な授業の構築方法について、多様なヒントを得ることができた。資料の作り方や授業中のジェスチャーなどについて、具体的に実地で学ぶことができた。
- 3) 英語の苦手な自分でも何とかなるところもあることを認識し、英語の授業を普及する糸口が得られた。
- 4) 講師およびスタッフの皆さんの献身的な貢献に感謝したい。他の形式ではなかなか得られない貴重な体験をすることができた。

## 「革命」進行中のオランダから ～ライデン大学 FD プログラムに参加して～

8月24～28日にオランダのライデン大学などで行われた「英語による授業に関するFDプログラム」(詳細は7～8ページを参照)に参加しました。

ライデン大学は学生数1万8000人の総合大学で、国境を越えた学生の移動がますます活発になる中、2005年から修士課程のプログラムを原則として英語で提供しています。EUの非英語圏の大学では、英語による授業に対応するため、教員の能力開発や学生支援をどのように進めているのか？ライデン大学の研修プログラムを体験し、その実態をつぶさに知ることが、今回の研修の主な目的でした。

最も印象的だったのは、教員や学生の英語力を評価する方法が全学的なシステムとして確立され、実施されていることです。研修中、その評価の模擬セッションに参加する機会がありました。

インタビュアーと外国語教育専門の評価者がペアになり、被験者(評価対象の教員等)に英語で面接します。被験者は、インタビュアーの質問に答えたり、与えられた写真について口頭で説明したり、自分の研究について自由にプレゼンテーションをしたりします。その間、15分足らず。評価者は、語彙や発音、流暢さ、聞き手に訴えかける力などの観点ごとに、能力記述文(「○○ができる」)で示された基準を使って、あっという間に英語力を評定していきます。面接後、「初歩」から「熟達」の6段階で総合評定が下され、その場で被験者にフィードバックされます。ちなみに、ここで用いている基準は、欧州評議会の「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)

をもとに、大学が独自に組み立てたものです。

ライデン大学では、教員に対して6段階評定で上から2番目のレベルを要求しています。この基準に満たない場合、大学の費用で英語研修が行われます(プレゼンテーションや発音、ライティングなどに特化したコースがあります)。外国語で講義をする際のコツも体系化されていて、研修プログラムなどを通じて教員に提供されているそうです。英語力の評価や研修は主に学内の外国語センターが担当しますが、専属の英語支援スタッフが論文のチェックなどのサービスを提供している部局もあります。

ライデン大学のスタッフが口々に述べていたのは、「今、ここで起きているのは革命(revolution)だ」ということです。外国語センターの責任者は、「たんに個々の授業を英語に置き換えればよいという発想ではダメ」とも話していました。評価・研修の仕組みや、その背後にある全学レベルでの言語政策(language policy)が有機的に結びつくことが必要である、と。英語力評価の面接はその端的な現れです。

個人的には、「革命」という言葉に象徴される物事の進み方に若干戸惑いもありましたし、そもそもオランダと東アジアの中の日本とでは、「国際化」の文脈も異なります。それでも、北大の国際化にとって、オランダの経験は、英語による授業を徹底的に導入した先例として、一つの大きな参照例となると感じました。(三上直之)

## 全学教育 GENERAL EDUCATION

# 全学教育委員会報告 (第 77 回)

平成 21 年 7 月 24 日 (金) に第 77 回の全学教育委員会が開催され、来年度の開講計画を中心に、つぎのような議題について話し合いました。

## 第 77 回全学教育委員会

### 議題

1. 「退職教員の非常勤講師採用について」の見直し
2. H22 年度全学教育科目の開講計画
3. 「総合入試」導入に伴う全学教育科目の充実
4. 「平成 18 年度以降の新教育課程」に関する中間報告書編集担当

### 報告事項

1. H20 年度の成績評価に関する照会結果及び H21 年度第 1 学期の成績評価の依頼
2. H21 年度第 1 学期履修者数
3. H21 年度第 2 学期の履修調整
4. 英語単位「優秀認定」の実施
5. 英語Ⅲ・英語Ⅳ履修クラスの抽選
6. 平成 21 年度 1 学期成績公開・確認期間
7. TA 研修会の参加状況
8. その他：H20 年度自然科学実験報告書

### 「退職教員の非常勤講師採用」の特例措置の見直し

議題 1 では、退職教員（本学定年年令を超えるもの）を非常勤講師として採用する特例措置の見直しが検討されました。現行の措置が、平成 19 年度から 2 年間の時限承認であったためです。教員再雇用への対応なども考慮して、以下のように改訂しました。

退職教員（本学定年年令を超える者）を非常勤講師として採用する特例措置（再雇用教員を除く）について、全学教育科目の教養科目のうち一般教育演習（フレッシュマンセミナー）、共通科目（情報学）及び外国語科目・外国語演習並びに基礎科目（数学、物理学、化学、生物学、自然科学実験）に次の条件の下で採用することができる。

- (1) 原則として、在職中における全学教育担当経験者で、全学教育委員会及び科目責任者会議で当該科目を担当するにふさわしいと認められた者とする。
- (2) 68 歳以下のものとする。
- (3) この採用方法については、平成 22 年度から 6 年間の期間に限り適用するものとする。

### H22 年度全学教育科目の開講計画

H22 年度全学教育科目の開講計画のための基礎データ、責任部局・各部局への提供依頼案等の詳細が説明され、了承されました。開講科目の提出締切（10 月 2 日）、シラバス入力依頼（12 月初旬）、時間割確定（12 月下旬）、シラバス入力締切（1 月 29 日）、シラバスの HP 公開（3 月 1 日）の日程で作業をすすめます。なお TA は必要に応じ、履修者 70 名以上の科目に 1 名、120 名以上には 2 名を認めることとしました。非常勤講師担当の 70 名以上の科目でも、TA を認めることとしています。TA を活用して授業の充実をお願いします。

### 「総合入試」導入に伴う全学教育科目の充実

平成 23 年度から導入する総合入試の概要、入学後の教育課程の検討状況が説明されました。1 年生はすべて「総合教育部」に属し、教育は文系・理系の二通りの共通カリキュラムのもとに行われます。1 年生への学修・履修・進級指導のために、アカデミック・アドバイザーを配置することになります。「総合入試」の導入に伴い、総合科目、主題別科目、文系基礎科目等の充実について、教育改革室 WG での検討と合わせて、全学教育委員会でも検討をはじめることになりました。



採用し、管理運営の効率化を図りました。TAの雇用のべ人数はドイツ語17名、フランス語9名、中国語32名です。TAには講習会を複数回実施して参加を義務づけ、さまざまな事態に対処するための指導を徹底して行いましたが、今後もこの方針を続ける予定です。

実施する教員側から見ると、人員増加の見込みがない状況においては、対面授業の補助手段として一定の有効性を認めることができるでしょう。

平成19年度第2学期と比較すると評価の平均値(GPA)も向上しています。

	平成19年度 GPA (評価者数)	平成20年度 GPA (評価者数)
ドイツ語	2.19 (1012)	2.28 (1003)
フランス語	1.98 (416)	2.33 (504)
ロシア語	2.18 (62)	2.22 (79)
中国語	2.10 (779)	2.45 (672)

### 3. 受講者による評価

今後の語学教育を考える上では、昨年度導入された新しい学習システムを受講者がどう評価するかも大きな意味を持つでしょう。すでに受講者全員を対象としたオンラインアンケートを実施しているので、その結果の一部を以下に紹介します(以下の質問項目は園田勝英先生により、単位は%です)。

質問1 「CALL 授業を受講したことは自分にとってプラスとなりましたか？」

	なった	ならなかった	どちらともいえない
ドイツ語	56.5	12.0	31.5
フランス語	61.0	13.0	26.0
ロシア語	56.5	17.4	24.6
中国語	69.3	9.3	21.3

(ロシア語は回答が無効な者がいるため合計が100%にならない)

質問2 「CALL 授業は充実した外国語学習の機会を提供していると思いますか？」

	そう思う	思わない	どちらともいえない
ドイツ語	34.4	16.0	49.6
フランス語	33.0	15.0	51.0
ロシア語	40.6	26.1	33.3
中国語	38.9	10.7	50.4

(フランス語は回答が無効な者がいるため合計が100%にならない)

以上により、言語により多少の差はあるものの、多くの学生はCALL授業にかなりの程度満足し、かつ真面目に取り組んでいたことがうかがえます。初年度のCALL授業は有効だったといえます。

### 4. 今後の課題

しかし克服すべき課題はなお多いといわなければなりません。まずシステムの維持管理運営にはきわめて高度な専門知識と技能が必要とされるため、そのための人材の確保と充実が望まれます。どの言語系も特定の教員の献身的作業に大きく依存しているのが実状で、何らかの事故等により現体制の維持が不可能になった場合、大きな困難が予想されます。とくに担当教員が少ない場合は教材の開発と授業を自転車操業的手法で実施せざるをえません。教材開発と授業に専念する教員、CALL授業を補助するTA、そしてシステムの維持管理運営を専門に担当する技術職員がさらに充実確保できれば、より安定的な運営が可能となり、さらに大きな効果が得られるものと思われれます。

なお本学では選択必修枠の初習外国語として上記のほかにスペイン語と韓国語を開講していますが、専任教員が一名のみであるため、CALL授業の導入と展開は今後の課題です。

最後に、CALL授業の実施・運営には事務の方々にも手厚いご支援をいただいていることを明記し、企画部情報基盤課の池田光雄さんにはとくに深くお礼を申し上げます。

(寺田龍男 外国語教育センター教授)

全学教育履修者数一覧 (1学期) (H20/H16 年度比較)

区分	授業科目	20年度1学期			16年度1学期			20/16年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラス履修者数	クラス数	履修者数	1クラス履修者数	履修者数増減	比%
主題別科目	思索と言語	7	833	119.00	10	1,070	107.00	▲ 237	77.9%
	思索と言語(論文指導)	7	131	18.71	7	166	23.71	▲ 35	78.9%
	歴史の視座	7	903	129.00	12	1,204	100.33	▲ 301	75.0%
	歴史の視座(論文指導)	2	31	15.50	9	153	17.00	▲ 122	20.3%
	芸術と文学	7	542	77.43	15	1,632	108.80	▲ 1,090	33.2%
	芸術と文学(集中)	2	173	86.50	2	168	84.00	▲ 5	103.0%
	芸術と文学(論文指導)	6	115	19.17	5	146	29.20	▲ 31	78.8%
	社会の認識	21	2,098	99.90	17	2,542	149.53	▲ 444	82.5%
	社会の認識(論文指導)	10	219	21.90	14	388	27.71	▲ 169	56.4%
	科学・技術の世界	21	1,806	86.00	28	4,035	144.11	▲ 2,229	44.8%
	科学・技術の世界(論文指導)	1	29	29.00	4	82	20.50	▲ 53	35.4%
	主題別科目 小計	91	6,880	75.60	123	11,586	94.20	▲ 4,706	59.4%
	(集中・論文指導除く)小計	63	6,182	98.13	82	10,483	127.84	▲ 4,301	59.0%
(集中)小計	2	173	86.50	2	168	84.00	▲ 5	103.0%	
(論文指導)小計	26	525	20.19	39	935	23.97	▲ 410	56.1%	
総合科目	環境と人間	14	1,088	77.71	21	3,167	150.81	▲ 2,079	34.4%
	健康と社会	8	1,737	217.13	8	2,546	318.25	▲ 809	68.2%
	人間と文化	7	544	77.71	4	488	122.00	▲ 56	111.5%
	特別講義	2	122	61.00	2	785	392.50	▲ 663	15.5%
	総合科目 小計	31	3,491	112.61	35	6,986	199.60	▲ 3,495	50.0%
一般教育演習	一般教育演習	84	1,666	19.83	99	2,094	21.15	▲ 428	79.6%
	(集中・論文指導除く)小計	25	496	19.84	78	1,649	21.14	▲ 1,153	30.1%
	(集中:フィールド体験)小計	10	239	23.90	7	152	21.71	▲ 87	157.2%
	(論文指導)小計	49	931	19.00	14	293	20.93	▲ 638	317.7%
	共通科目 小計	86	5,797	67.41	87	6,426	73.86	▲ 629	90.2%
共通科目	体育学A(実技・1単位)	53	2,076	39.17	59	2,478	42.00	▲ 402	83.8%
	体育学B(講義・2単位)	1	80	80.00	—	—	—	▲ 80	—
	情報学	19	2,689	141.53	15	2,713	180.87	▲ 24	99.1%
	統計学	11	896	81.45	11	1,183	107.55	▲ 287	75.7%
	インターンシップ	2	56	28.00	2	52	26.00	▲ 4	107.7%
共通科目 小計	86	5,797	67.41	87	6,426	73.86	▲ 629	90.2%	
外国語を除く教養科目 合計	292	17,834	61.08	344	27,092	78.76	▲ 9,258	65.8%	
うち論文指導(主題別・一般教育演習)小計	75	1,456	19.41	53	1,228	23.17	▲ 228	118.6%	
外国語科目	英語	141	5,590	39.65	213	8,406	39.46	▲ 2,816	66.5%
	ドイツ語	37	1,059	28.62	54	1,745	32.31	▲ 686	60.7%
	フランス語	14	564	40.29	33	986	29.88	▲ 422	57.2%
	ロシア語	6	89	14.83	8	154	19.25	▲ 65	57.8%
	スペイン語	6	247	41.17	—	—	—	▲ 247	—
	中国語	36	763	21.19	47	1,670	35.53	▲ 907	45.7%
	韓国語	5	156	31.20	—	—	—	▲ 156	—
外国語科目 小計	245	8,468	34.56	355	12,961	36.51	▲ 4,493	65.3%	
外国語演習	英語演習	90	1,487	16.52	17	159	9.35	1,328	935.2%
	ドイツ語演習	19	266	14.00	12	99	8.25	167	268.7%
	フランス語演習	14	177	12.64	14	111	7.93	66	159.5%
	ロシア語演習	9	32	3.56	6	24	4.00	8	133.3%
	スペイン語演習	7	107	15.29	2	35	17.50	72	305.7%
	中国語演習	22	262	11.91	6	58	9.67	204	451.7%
	韓国語演習	7	69	9.86	2	34	17.00	35	202.9%
	外国語特別演習	14	142	10.14	9	160	17.78	▲ 64	68.9%
西洋古典語	—	—	—	2	46	23.00	—	—	
外国語演習 小計	182	2,542	13.97	70	726	10.37	1,816	350.1%	
外国語 合計	427	11,010	25.78	425	13,687	32.20	▲ 2,677	80.4%	
基礎科目	人文科学の基礎	5	716	143.20	—	—	—	716	—
	社会科学の基礎	5	701	140.20	—	—	—	701	—
	文系基礎科目 小計	10	1,417	141.70	—	—	—	1,417	—
	線形代数	32	1,956	61.13	37	2,193	59.27	▲ 237	89.2%
	微分積分学	32	1,906	59.56	45	2,831	62.91	▲ 925	67.3%
	数学概論	5	312	62.40	2	189	94.50	123	165.1%
	数学 小計	69	4,174	60.49	84	5,213	62.06	▲ 1,039	80.1%
	基礎物理学・物理学	36	1,998	55.50	45	2,946	65.47	▲ 948	67.8%
	基礎化学・化学	34	2,009	59.09	36	2,640	73.33	▲ 631	76.1%
	基礎生物学・生物学	20	1,389	69.45	28	1,777	63.46	▲ 388	78.2%
	基礎地学・地学・基礎地球惑星科学	7	534	76.29	8	820	102.50	▲ 286	65.1%
	理科 小計	97	5,930	61.13	117	8,183	69.94	▲ 2,253	72.5%
	基礎自然科学実験	1	10	10.00	1	7	7.00	3	142.9%
	自然科学実験	18	942	52.33	—	—	—	▲ 624	60.6%
	基礎実験	9	17	1.89	18	1,583	87.94	—	—
実験 小計	28	969	34.61	19	1,590	83.68	▲ 621	60.9%	
基礎科目 合計	204	12,490	61.23	220	14,986	68.12	▲ 2,496	83.3%	
日本語・日本事情	4	32	8.00	3	82	27.33	▲ 50	39.0%	

全学教育履修者数一覧(2学期)(H20/H16年度比較)

区分	授業科目	20年度2学期			16年度2学期			20/16年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラス履修者数	クラス数	履修者数	1クラス履修者数	履修者数増減	比%
主題別科目	思索と言語	13	1,006	77.38	13	1,050	80.77	▲44	95.8%
	思索と言語(論文指導)	3	25	8.33	8	140	17.50	▲115	17.9%
	歴史の視座	12	1,167	97.25	6	528	88.00	639	221.0%
	歴史の視座(論文指導)	2	31	15.50	6	75	12.50	▲44	41.3%
	芸術と文学	11	1,030	93.64	16	946	59.13	84	108.9%
	芸術と文学(集中)	—	—	—	1	49	49.00	▲49	—
	芸術と文学(論文指導)	1	22	22.00	6	159	26.50	▲137	13.8%
	社会の認識	12	1,330	110.83	21	2,897	137.95	▲1,567	45.9%
	社会の認識(論文指導)	7	107	15.29	8	136	17.00	▲29	78.7%
	科学・技術の世界	9	736	81.78	19	1,733	91.21	▲1,195	38.1%
	図形科学概論	—	—	—	2	198	99.00	—	—
	科学・技術の世界(論文指導)	0	0	0.00	3	59	19.67	▲59	0.0%
	主題別科目 小計	70	5,454	77.91	109	7,970	73.12	▲2,516	68.4%
	(集中・論文指導除く)小計	57	5,269	92.44	77	7,352	95.48	▲2,083	71.7%
(集中)小計	—	—	—	1	49	49.00	▲49	—	
(論文指導)小計	13	185	14.23	31	569	18.35	▲384	32.5%	
総合科目	環境と人間	11	967	87.91	9	1,527	169.67	▲560	63.3%
	健康と社会	7	1,076	153.71	6	983	163.83	93	109.5%
	人間と文化	5	505	101.00	5	937	187.40	▲432	53.9%
	特別講義	1	335	335.00	1	487	487.00	▲152	68.8%
	総合科目 小計	24	2,883	120.13	21	3,934	187.33	▲1,051	73.3%
一般教育演習	一般教育演習	56	929	16.59	61	1,019	16.70	▲90	91.2%
	(集中・論文指導除く)小計	17	284	16.71	47	763	16.23	▲479	37.2%
	(集中:フィールド体験)小計	4	115	28.75	2	50	25.00	65	230.0%
	(論文指導)小計	35	530	15.14	12	206	17.17	324	257.3%
共通科目	体育学A(実技・1単位)	48	1,700	35.42	55	2,209	40.16	▲509	77.0%
	体育学B(講義・2単位)	1	63	63.00	—	—	—	63	—
	情報学	14	724	51.71	19	1,636	86.11	▲912	44.3%
	統計学	11	453	41.18	11	825	75.00	▲372	54.9%
	共通科目 小計	74	2,940	39.73	85	4,670	54.94	▲1,730	63.0%
外国語を除く教養科目 合計	224	12,206	54.49	276	17,593	63.74	▲5,387	69.4%	
うち論文指導(主題別・一般教育演習)小計	48	715	14.90	43	775	18.02	▲60	92.3%	
外国語科目	英語	153	5,173	33.81	199	7,648	38.43	▲2,475	67.6%
	ドイツ語	32	1,066	33.31	43	1,444	33.58	▲378	73.8%
	フランス語	12	548	45.67	26	775	29.81	▲227	70.7%
	ロシア語	5	87	17.40	7	121	17.29	▲34	71.9%
	スペイン語	6	255	42.50	—	—	—	255	—
	中国語	27	720	26.67	36	1,324	36.78	▲604	54.4%
	韓国語	5	160	32.00	—	—	—	160	—
外国語科目 小計	240	8,009	33.37	311	11,312	36.37	▲3,303	70.8%	
外国語演習	英語演習	52	1,112	21.38	18	291	16.17	821	382.1%
	ドイツ語演習	20	285	14.25	8	27	3.38	258	1055.6%
	フランス語演習	14	198	14.14	14	88	6.29	110	225.0%
	ロシア語演習	8	31	3.88	9	42	4.67	▲11	73.8%
	スペイン語演習	5	84	16.80	2	43	21.50	41	195.3%
	中国語演習	27	236	8.74	5	47	9.40	189	502.1%
	韓国語演習	7	51	7.29	1	7	7.00	44	728.6%
	外国語特別演習	14	118	8.43	10	193	19.30	▲84	58.4%
西洋古典語	—	—	—	2	9	4.50	—	—	
外国語演習 小計	147	2,115	14.39	69	747	10.83	1,368	283.1%	
外国語 合計	387	10,124	26.16	380	12,059	31.73	▲1,935	84.0%	
基礎科目	線形代数学	26	1,364	52.46	28	1,562	55.79	▲198	87.3%
	微分積分学	28	1,749	62.46	31	1,891	61.00	▲142	92.5%
	数学概論	1	19	19.00	2	39	19.50	▲20	48.7%
	数学 小計	55	3,132	56.95	61	3,492	57.25	▲360	89.7%
	基礎物理学・物理学	31	1,755	56.61	29	1,861	64.17	▲106	94.3%
	基礎化学・化学	30	1,916	63.87	28	1,935	69.11	▲19	99.0%
	基礎生物学・生物学	19	1,358	71.47	19	1,271	66.89	87	106.8%
	基礎地学・地学	4	454	113.50	4	409	102.25	45	111.0%
	理科 小計	84	5,483	65.27	80	5,476	68.45	7	100.1%
	心理学実験	4	62	15.50	4	79	19.75	▲17	78.5%
	自然科学実験	18	1,053	58.50	—	—	—	▲1,046	50.3%
	基礎実験	3	6	2.00	22	2,105	95.68	—	—
実験 小計	25	1,121	44.84	26	2,184	84.00	▲1,063	51.3%	
基礎科目 合計	164	9,736	59.37	167	11,152	66.78	▲1,416	87.3%	
日本語	1	19	19.00	2	51	25.50	▲32	37.3%	
全学教育科目 2学期合計	776	32,085	41.35	825	40,855	49.52	▲8,770	78.5%	
全学教育科目 1学期合計	927	41,366	44.62	992	55,847	56.30	▲14,481	74.1%	

## \*\*\* 全学教育の科目責任者からひとこと \*\*\*

### 想像力と創造性をきっと磨いてくれるはず！

「芸術と文学」企画責任者 文学研究科 准教授 安達 真由美

今年度「芸術と文学」では一年を通して30の授業を提供しています。その内訳は、文学・物語（10件）、舞台芸術（3件）、映画（4件）、美術・建築（4件）、音楽（5件）、総合的内容（4件）と、文学系が主流を占めるものの、視覚・音響芸術等、幅広いトピックスが展開しており、学生さんたちの多様な興味・関心に応えられるものと考えています。

今回この原稿を書かせて頂くにあたり、あらためてそれぞれのシラバスに目を通させて頂いたのですが、そこから見えた「芸術と文学」の本質とは、ことば、文字、色彩、テクスチャ、音声、映像、音楽、照明等、異なる表現媒体を通して実現された（あるいは実現し得る）「想像力と創造性の追求」に尽きます。古代ギリシャの叙事詩も、中国の変身物語りも、風の谷のナウシカも、ベルリンの壁も、イサム・

ノグチのBlack Sunも、ドストエフスキーの作品も、グレゴリオ聖歌も、それを世に送り出した社会・文化的背景を理解するためには時間と空間を超える必要があり、それを可能にしてくれるのが想像力です。そして、芸術作品を享受する側としてだけではなく、学生さん自身がアイデアやイメージをことばや音楽で表現してみることで、自分の中に秘められた創造性にも気づけるかもしれません。そんな機会を与えてくれる授業を、学生の皆さんに楽しんで頂けたらと思います。

## 高等教育 HIGHER EDUCATION

### 特任研究員（旧外国人研究員）にオーメット氏

今年度の特任研究員に、インディアナ大学ブルームントン校教育政策・評価センターのJudith Ann Ouimet（ジュディス・アン・オーメット）氏が着任しました。期間は7月1日から2ヶ月間です。オーメット氏は1985年テキサス大学オースティン校国際経済・経営管理学科を卒業、1998年に同大学教育学博士を取得しています。現在インディアナ大学で学部教育担当副学長補佐（Assistant Vice Provost for Undergraduate Education）を務めています。

オーメット氏は2000年からインディアナ大学で始まったIndiana University-Bloomington National Survey of Student Engagement (NSSE)にAssistant Project Managerとして参加し、その基礎を築きました。NSSE（ネッシー）は大学ある

いはカリキュラム評価のために作られたアンケート調査で、今では全米700以上の大学が参加しています。NSSEの調査結果は大学間の比較を可能とし、教育改革に資するところが大きな試みです。

オーメット氏は七月末に開催された国際シンポジウム（学生の学習成果を上げるための教員研修～授業成果についての学生調査～）や同志社大学（NSSEとCLASSEを利用した学生エンゲージメントの評価）で講演しました。さらに、高等教育ジャーナルにその研究成果を発表する予定です。（細川敏幸）



## 北海道大学教育倫理綱領および科学者の行動規範の制定

高等教育開発研究部では、平成18年7月に「教員の倫理綱領についての研究会」を組織し、FD等の基準ともなる教員の教育倫理綱領について検討を重ね、中間報告案、修正案を提案してきましたが、このたび教育改革室、教育研究評議会、役員会での

審議を経て、「北海道大学教育倫理綱領」と「北海道大学における科学者の行動規範」が制定されました。本学の教員は、これらに則り、高い倫理観に支えられた責任ある教育・研究活動を行うことが求められています。(安藤厚)

平成21年6月23日制定

### 北海道大学教育倫理綱領

北海道大学は、札幌農学校に遡る長い歴史の中で、「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」という教育研究の基本理念を培い、教育の基本的目標を、豊かな人間性と高い知性を涵養する幅広い人間教育、自由・自主独立の精神の涵養と自律的個の確立、人権を尊重し、社会的要請に的確に対応しうる基盤的能力の育成を目指すとして定めている。これらの目標を達成するために、北海道大学の教員は、自らを律する規範を次のように定める。

- 第1 教員は、すべての学生が「高邁なる大志」を育み、新しい道を切り拓くことができるよう、模範と指針を示し、自由な学風の醸成に努める。
- 第2 教員は、すべての学生に自律的個の確立を促し、その人格を尊重し、敬意をもって接する。
- 第3 教員は、学習目標を明確に示し、つねに授業改善に努め、学生の自主的な学習を支援する。
- 第4 教員は、学生に明確な成績評価基準を示し、学習目標に即した公正な評価を行う。
- 第5 教員は、きめ細かな学生指導に努め、個人情報保護に最大限の注意を払う。

### 北海道大学における科学者の行動規範

科学と科学研究は人類社会の平和と安全および公正で豊かな未来のためにあり、科学技術の発展と科学者の主体的な判断に基づく研究活動は、社会からの信頼と負託を前提としてはじめて社会的認知を得ることができる。それゆえ、科学者は研究活動においてその透明性を維持し、社会に対する説明責任を果たすとともに、厳しく高い倫理観を要求されていることを常に自覚しなければならない。ここでいう「科学者」とは、人文・社会科学から自然科学までを包含するすべての学術分野において、新たな知識を生み出す活動、あるいは科学的な知識の利活用に従事する研究者、専門職業者を意味する。

こうした認識のもと、北海道大学は本学において研究活動を行うすべての科学者が、日本学術会議が策定した「科学者の行動規範」(平成18年10月3日)に基づき、研究活動を行うことを宣言し、行動規範をここに定める。

- 1) 科学者は、研究の立案・計画・申請・実施・報告等の過程において、研究・調査データのねつ造、改ざん、盗用等の不正行為を行わず、またこれに加担しない。
- 2) 科学者は、研究活動の透明性と説明責任を果たすために、実験や調査の記録等の研究資料を適切に保存する。
- 3) 科学者は、自らの行っている研究が社会の負託に応える重大な責務であることを強く自覚し、研究の実施、研究費の使用等に当たっては、法令や関係規則を遵守する。

※1 研究活動上の不正に関する申立て

<http://www.hokudai.ac.jp/sangaku/husei/report.html>

※2 国立大学法人利益相反マネジメント規程

[http://www.hokudai.ac.jp/jimuk/reiki/reiki\\_honbun/au01005431.html](http://www.hokudai.ac.jp/jimuk/reiki/reiki_honbun/au01005431.html)

# 戦略的大学の連携支援プログラムに採択

## 《相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出—国公立4大学 IR ネットワーク—》

平成 21 年度「大学教育充実のための戦略的大学の連携支援プログラム」(大学改革推進等補助金)に「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出—国公立4大学 IR ネットワーク—」(代表校：同志社大学；連携校：北海道大学，大阪府立大学，甲南大学；平成 21～23 年度)が採択されました。

戦略的大学の連携支援プログラムは，国公立4大学の連携による地方の大学教育の充実に重点的に取り組むことが早急に求められていることから，昨年度に公募がはじまり，本年度は全国の国公立大学等からの応募 119 件のうち 38 件が採択されました。

この取り組みでは，国公立4大学が連携して，教育の質保証を促進するため，学生調査を軸とした客観的なデータに基づいて教育の現状を評価する IR (Institutional Research) 機能の充実，IR を活用した連携大学間での相互評価，その評価結果を学生の学習時間の確保，単位制度の実質化に結びつける教育環境の整備を目指します。

また，その成果を学生に対する教育に還元するため，外国語（英語）科目に関する学士課程教育の

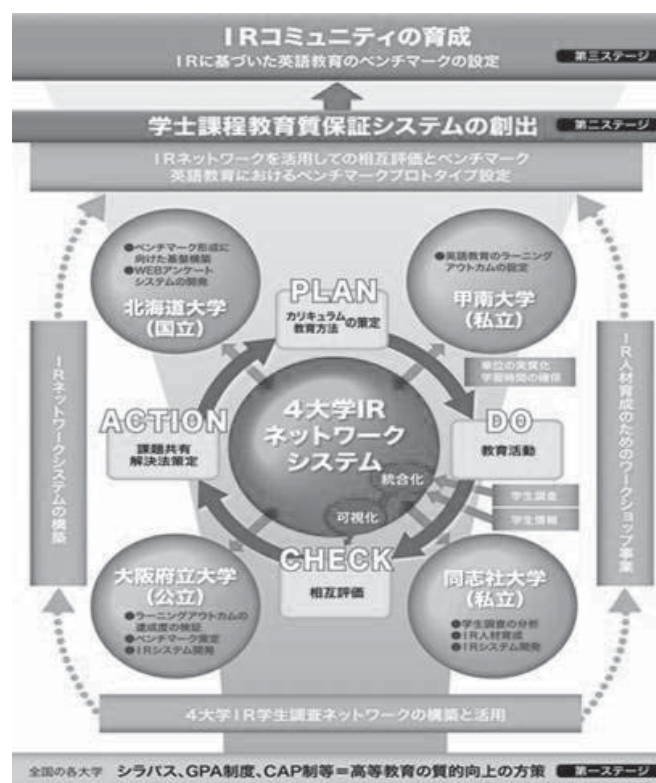
ラーニング・アウトカム目標の設定，ナンバリング制による課程編成・実施方針の明確化のための具体的方策を展望し，こうした取り組みを通じて教育の質保証システムの構築を企図しています。

さらに，本取り組みの最終目標である IR を基盤とした全国規模の大学コミュニティづくりに向けて，連携大学が協力して IR 人材育成を進めます。

具体的には，同志社大学が開発してきた新入生および3年次生に対する学習成果に関する学生調査アンケートを北大でも実施し，他大学のデータとも比較して，「学士力」の向上，教育の質保証の進捗状況を把握する手法を開発します。

併せて，本学でも進めてきた，GPA，履修単位数などの教務情報データに基づく教育改善の手法を4大学で共有し，客観的なデータに基づく評価・改善の文化を広く普及することを目指します。

設置形態，規模，歴史・伝統の異なる4大学の間で，共通の目標，評価基準，改善手法を開発することは，大きな挑戦です。  
(安藤厚)



# 教育改善を目指す FD・SD ネットワークの構築

## ～ IDE 大学セミナー開催される～

8月20日(木)～21日(金)に、今年度の IDE 大学協会北海道支部のセミナーが本学との共催で、上記のテーマでホテル札幌ガーデンパレスにおいて実施されました。

大学設置基準における「FDの義務化」により、ここ二、三年の間に多くの地域でネットワーク、コンソーシアムと呼ばれる連携組織が結成されています。ひとつの大学ではできない研修を、多数の大学が協力して実施することが、その活動の目的です。しかし、最終的な目的は研修そのものではなく、各大学の教育改善・学生の学力向上にあることは明らかです。そこで、いかに教育改善を進め学生の学力向上を図るか、その点に絞って他地域のFD・SDネットワークの実践的活動についての事例を学ぶとともに、道内の動向も紹介し、今後の各大学の活動の参考となるよう企画しました。

一日目には、FDネットワークの成功例として愛媛大学の佐藤先生と山形大学の小田先生の講演がありました。両者ともFDの北大モデルを踏襲しながら、複数の参加大学に活動を広げており、その苦労話とともに成功の秘訣を話されました。

二日目は、すでに活動を開始しているか今年中に活動を開始する予定の道内4ネットワークの詳細を報告してもらいました。旭川は地域の健康、北海道東部地域は教員免許更新講習に的を絞った活動です。函館は大学の教育活動全般を、北海道地区は

FD・SD(職員研修)を組み合わせたネットワーク活動を目指しています。

今後発展していくであろう地域ネットワークの活動内容を詳細に聞くことができ有意義な二日間でした。なお、IDE大学協会は学会組織をとった高等教育研究の組織で、どなたでも加入でき、セミナーに参加(無料)もできます。詳しくは以下のアドレスをご覧ください。

IDE大学協会 (<http://ide-web.net/>)

(細川敏幸)

表1 プログラム

・特別講演 (20日)	
「成功するFDネットワークの運営方法 ～四国地区大学教職員能力開発ネットワークを事例に～」	愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室副室長 准教授 佐藤 浩章
・特別講演 (20日)	
「東日本地域FDネットワーク“つばさ”の活動」	山形大学高等教育研究企画センター 教授 小田 隆治
・シンポジウム (21日)	
「北海道の教育コンソーシアム活動」	司会：北海道大学 教授 細川 敏幸
「旭川ウェルビーイング・コンソーシアム」	旭川医科大学 教授 吉田 貴彦
「北海道東部地域免許状更新講習コンソーシアム」	北海道教育大学 准教授 廣田 健
「キャンパス・コンソーシアム函館」	北海道教育大学 教授 雁澤 好博
「北海道地区FD・SD推進協議会」	北海道大学 教授 細川 敏幸

写真1 講演する小田隆治氏

写真2 佐藤浩章氏

## 授業を変える e - ラーニング ～第 14 回北大教育ワークショップ～

「北海道大学教育ワークショップ」(全学 FD) は平成 19 年度からは年 2 回開催され、今年度 1 回目(第 14 回) は、2009 年 6 月 5 日(金)、6 日(土)の両日、いつもの奈井江町農業改善センター(奈井江温泉ホテル北の湯)で行われました。

今回は、本学からのみ参加者を募り、各部局からの参加者 32 名に、世話係、講師、事務職員など合わせて総勢 40 名で実施されました。

初日の 5 日は大学祭で情報教育館周辺は混雑しているため、事務局大会議室で午前 8 時 15 分から受付、8 時 30 分にバスで出発しました。バスの中では、例年のように、参加者の自己紹介を行い、会場に到着後、直ちに記念写真をとり、午前 9 時 55 分から脇田稔センター長(総長代理)の挨拶で研修が始まりました。

今回のテーマは、「授業を変える e-ラーニング」です。現在、単位の実質化のため魅力的な授業を工夫して学生の学習意欲の向上を図ることが求められています。一つの方法として e-ラーニングを取り入れることが考えられます。

ワークショップでは、参加者を 5 グループに分け、魅力ある授業の工夫を盛り込み、できるだけ e-ラーニングを取り入れて、新しい授業を設計す

るという課題で、グループ作業を行いました。

授業の設計は、3 つのセッションに分けられ、(I) 科目名と目標、(II) 方略(15 回分の授業内容)、(III) 「評価基準」の順に行われました。各セッションは、(1) 30 分程度のミニ講義、(2) 小グループに分かれての 60 分の討論、(3) 全員が集まっての討論の成果の発表会という 3 つの部分からなるセッションを繰り返すという構成で、例年のように有意義な会になりました。

具体的には、参加者全員が専門分野が片寄らないように A、B、C、D の 4 グループに分かれ、それぞれのグループが、あらかじめ指定されている、A と B: 一般教育演習、C: 総合科目、D: 大学院共通授業、などの科目を設計する課題にいどみました。各グループが設計した科目名、目標は表 1 の通りです。

夕食後には、日本の大学では北大理学研究院の鈴木久男教授によって最初に導入されたクリッカーについて、山田邦雅特任准教授のミニ講義と実践練習を行いました(写真 6、7)。

2 日目にはワークショップ終了後に、本 FD では初めて研修会修了証書の授与式が行われました。

(西森敏之)

写真3 アイスブレーキング

写真4 グループ討論

写真5 グループ討論

写真6 クリッカーのミニ講義

写真7 クリッカーの実践練習

写真8 修了証書授与式

表1 各グループが作成したシラバスから ... 科目名と目標目標

## &lt;グループ A&gt;

【科目名】一般教育演習「食から見た北海道」

## 【一般目標】

- ① 身近な北海道の食を題材にして調査方法を学ぶ。
- ② 北海道の産業構造を知る。
- ③ 北海道産の価値を理解するためにブランドイメージの構造を知る。
- ④ 食品産業における事故例より安全確保と危機管理を学ぶ。

## 【行動目標】

- ① 調査に基づいて論理的に表現できる。
- ② 北海道産食品を科学的に区別する方法を列挙できる。
- ③ 北海道の食糧産業の現状を把握し、将来の方向性を提言できる。
- ④ 食糧産業に潜むリスクを概説できる。

## &lt;グループ B&gt;

【科目名】一般教育演習「ススキノ地域社会論～ススキノレジデンシー～」

【一般目標】地域の社会的問題を認識し、提起できる能力を身につけるために、社会問題のつづであるススキノの飲食店を事例に体験・分析する。

## 【行動目標】

- ① さまざまな人と十分コミュニケーションができる。
- ② インタビュー調査の設計ができる。
- ③ 経営（マネージメント）に関する基本が理解できる。
- ④ 法律や制度（雇用，衛生，教育）の基本が理解できる。
- ⑤ さまざまな問題点に対する解決法を提示できる。
- ⑥ 成果を取りまとめ、発表することができる。

## &lt;グループ C&gt;

【科目名】総合講義「豊かな生活を目指す環境科学」

## 【一般目標】

- ① 産業革命以降の人間活動が地球環境に与えてきた事実を理解する。
- ② 豊かな生活ならびにそれを実現するための環境科学について考える力を養う。

## 【行動目標】

- ① 人間活動が地球環境に与えてきた影響を列挙すると共に歴史的に系統立てる。
- ② 現在の環境科学技術の動向を理解する。
- ③ QOL の概念を理解し、それを高める方法を学ぶ。

## &lt;グループ D&gt;

【科目名】特論「生命科学と人間社会」

## 【一般目標】

- ① 生命科学の最先端の知識を理解し、現状での成果を評価する能力を身につける。
- ② 生命科学が抱える問題点を解決するために、現在の社会制度に関して考察する能力及び問題解決に向けた提言を行う能力を身につける。

## 【行動目標】

- ① 最先端の科学技術に関する知識を理解し、整理して記述できる。
- ② 社会生活における科学技術の成果を確認し、評価を行うことができる。
- ③ 問題を発見し、解決に向けた提言を行うことができる。

※【一般目標】は北大のシラバスでは「授業の目標」、【行動目標】は「到達目標」に当たります。行動目標（到達目標）は、学生がこの授業を通して身につけるべき能力を具体的に示し、成績評価の基準になります。

## 新しい研修の形を目指して ～次世代 FD 研究会ワークショップ～

高等教育開発研究部では、北大 FD10 年の経験を踏まえ、新しい教員研修の形を検討するため、学内外から協力者を集めて「次世代 FD 研究会」を立ち上げ、研究を続けています。

一度たっぷり時間をかけて議論をしたいということで、2009 年 9 月 4 日（金）、5 日（土）の 1 泊 2 日で「かもい岳温泉」において、ワークショップを行いました。プログラムは表 1 の通りです。

グループ討論の参加者は、高等教育開発研究部の 4 名を含めて北大の教員 16 名に、筑波大と北海道医療大から 1 名ずつの教員に学術国際部国際企画課の佐羽内喜久子さんが加わり、その他に教務課から 2 名が参加しました。

1 日目は、まず安藤厚高等教育開発研究部長がこのワークショップの目的と意義について話し、第 2 代研究部長だった阿部和厚北海道医療大教授が北大および日本における FD の歴史を振り返り、次の 10 年の FD の課題と展望について講演しました。

参加者がベテランたちであることから、軽くアイスブレイキングをしてからすぐに最初のセッションに入りました。

### 第 1 セッション

#### 「教育に関する職務綱領（行動規範）」

文学研究科の新田孝彦教授による北大で制定され

た倫理綱領などに関するミニレクチャーのあと、3 グループに分かれてグループ討論を行いました。

A グループを例としてあげれば、①学生の長所の発掘に努める、②講義時間を順守する、③学生との個別のコミュニケーションを重視する、④具体的で詳細なシラバスを作成する、⑤シラバスに基づいて授業概要を説明する、⑥毎回の授業でも授業概要を説明する、⑦予習・復習の具体的な課題を提示する、⑧多面的な評価方法を用いる、⑨学生の個人情報を記録した媒体の管理を徹底することなどが検討されました。

### 第 2 セッション

#### 「新しい研修の課題・目的・構造・内容」

高等教育開発研究部の細川敏幸教授による北大での全学 FD10 年の歴史の概観と 10 月 8 日に設立される「北海道地区 FD・SD 推進協議会」に関するミニ講義、入学者選抜研究部の山岸みどり教授による「全学 FD 参加者とエクセレントティーチャーに対するアンケート調査」などに関するミニ講義のあと、グループ討論に入りました。

B グループの討論を例としてあげると、FD 義務化による各部局の FD について「全学 FD」「学部 FD」「大学院 FD」のおおのおおの場合を分析し、持続可能な FD プログラム開発のための枠組みを検

討し、キーワードを列挙すれば、①綱領・行動規範の設定、②制度化：義務化を受けて General と Discipline 単位、FD 講師の交流、Accountability, Accreditation, 自己・学生・第三者評価制度、③日常化（身体化）：コンサル・システム、ワンストップサービス←教育支援、④専門化：Faculty Developer, Instructional consultant（理系と文系）の配置、⑤学外とも連携した各分野 FD ネットワークの開発・FD 人材交流、などについて討論しました。

1 日目の夕食後に、今年度から北大に本格的に導入された「クリッカー」の紹介があり、そのあと懇親会となりました。

### 第3セッション（2日目） 「新しい研修の形式・手法・実施計画」

安藤研究部長による8月末に筑波大と北大が共催した国際シンポジウムに関するミニ講義と、国際企画課の佐羽内喜久子さんによる「英語で教える教員のためのFD」に関するミニ講義のあと、グループ討論を行いました。

C グループの討論内容を例としてあげると、まず、「重要な課題」として、①大学（研究科）のために何を行うべきかを考え実行する教員が理想：すべての教員があるべき姿、②自分の研究室のことだけを考えている教員の意識改革、③これをFDの中でいかに実現していくかが課題、となりました。

次に、「成功している事例」として、①カリキュラム、シラバスを学科全員で検討する（ケンブリッジ大学、精華大学）、カリキュラム、シラバスの共有、共通科目の全体による設計、これらを保証する組織・制度が必要、TA との情報の共有も必要、②学会単位で teaching を教える、などを指摘し、「どのようなFDが必要か」という観点から、①小単位（学科）でのマイクロティーチングを継続して行う、②全学教育FDと同様な内容を、学部レベルでのFDでも確実に：全員への浸透、③そのためには継続性のあるリーダー、組織が必要、委員会組織ではない、責任・継続性のあるもの→FD 専門の組織：構成員を評価する制度が必要、などの提案をしました。

最後に、「全学FDの役割」について検討し、①各学部浸透させる、②ファシリテーターの養成、③これまでの知識と経験を広める、④学部のFDを構成するための組織モデルを作り、伝える、⑤単なる授業方法から、教員の仕事全体（管理、カリキュラム設計、社会奉仕、地域連携）への展開、⑥各学部の温度差をなくす努力、⑦具体的な教育技術：大人数講義、発音、⑧授業参観も意外に効果があるかもしれない、などが提案されました。

今回のワークショップは、次世代FDのあり方に関するさまざまな観点からの知見が得られ、有意義な会でした。  
(西森敏之)



表1 「次世代FD研究会」ワークショップ プログラム

## 2009年9月4日(金)

---

8:30	受付(情報教育館1階ロビー)
8:45	バス出発
10:25	かもい岳温泉, 玄関前で記念写真
10:35	挨拶「このワークショップの目的」(安藤厚)
10:45	講演「次の10年のFDの課題と展望」(阿部和厚)
11:30	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング(30分)
12:00	昼食 60分
13:00	ミニレクチャー1「教育に関する職務綱領(行動規範)について」(新田孝彦)
13:30	グループ作業1の課題の説明
13:40	グループ作業1「教育に関する職務綱領(行動規範)案」
14:40	発表・全体討論(3グループ)
15:10	休憩
15:30	ミニレクチャー2「北大FDの歴史と未来」(教育ワークショップ10年の歴史, 学内のFDに関する要望・需要, 北海道地区FD・SD推進協議会: 細川敏幸, 山岸みどり)
16:00	グループ作業2の課題の説明
16:10	グループ作業2「FDの設計1: 新しい研修の課題・目的・構造・内容」

---

17:10 発表・全体討論(3グループ)

18:00 夕食

18:40 ミニレクチャー「クリッカーを使う授業」(山田邦雅)

19:20 風呂など

20:00 懇親会

## 2009年9月5日(土)

7:30 朝食

8:30 ミニレクチャー3「FDの手法」(安藤厚: 国際シンポジウムから, 佐羽内喜久子: 英語で教える教員のためのFD)

9:00 グループ作業3の課題の説明

9:10 グループ作業3「FDの設計2: 新しい研修の形式・手法・実施計画」

10:10 発表・全体討論(3グループ)

10:50 休憩

11:00 参加者の個人的感想や意見

12:00 昼食

13:00 バス出発

14:30 JR札幌駅北口到着

## 生涯学習 LIFELONG LEARNING

### 生涯学習フォーラム開催される

8月18日に今年度第1回生涯学習計画研究フォーラムとして、生涯学習計画研究部客員准教授の佐藤浩章愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授が「大学職員に求められる能力リストの開発—SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）の事例をもとに一」をテーマに報告しました。

現在、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）において佐藤准教授を中心に組み

れている大学職員に求められる能力リストの開発の途中経過の説明とともに、佐藤浩章客員准教授の持論である、大学職員の専門職化論についての報告がありました。実際に、SPODでは、大学職員に求められる能力リストをどのようなプロセスと内容で作成しつつあるかの説明のあと、参加した大学の取組の報告も交えて活発な質疑・討論が行なわれました。

（木村純）

写真1 生涯学習フォーラムの様子

## 入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

### AO入試の新たな展開にむけて

～研究会を開催～

入学者選抜研究部は、昨年度から「北海道大学の次期AO入試の創造に関する研究会」のもとで、高等学校の進路指導担当者とともに本学のAO入試の課題や問題点を明らかにし、今後のAO入試の改善の方策を探っています。9月16日18時15分～20時30分、情報教育館4階共用多目的教室（1）にて第3回研究会を開催し、高校教員4名と本学教員8名（AO入試実施部局、入学者選抜研究部）が参加しました。今回は、高校教員からの「高等学校ではAO入試をどのように受けとめているのか」についての報告を中心に意見交換を行い、今後の研究計画の詳細を検討しました。

本学のAO入試は導入後9年が経過し、各部局で

追跡調査の実施や選抜形態の変更など様々な努力や工夫を積み重ね、広く認知されるようになりました。しかしAO入試に対する大学側の期待と高校生や進路担当者の意識の間のズレは、依然として大きいことが今回の研究会で再確認されました。平成23年度以降、本学のAO入試が縮小されることになりましたが、アドミッションポリシーにふさわしい学生を選抜するためには、継続的な改善の努力が不可欠です。研究会では、本学の9年間にわたるAO入試の経験を総括・記録する作業とともに、AO入試の新たな展開をめざして具体的な方策を検討する予定です。

（山岸みどり）

## センター日誌 CENTER EVENTS, May - August

### 5月

- 14日 (会議) 第2回総合教育部教育課程等編成WG  
(会議) 第1回総合教育部組織体制検討WG  
15日 (会議) 第76回全学教育委員会  
19日 (会議) 国立大学アドミッションセンター連絡会議  
20日~21日(会議) 全国大学入学者選抜研究連絡協議会  
20日 (会議) 第52回教務委員会  
26日 (会議) 入学者選抜委員会  
28日~29日(会議) 平成21年度国立大学教養教育実施組織会議(弘前)

### 6月

- 3日 (説明会) 宗谷地区/大学・短期大学進学相談会(稚内)  
(会議) 生涯学習計画研究委員会  
4日 (会議) 平成21年度第2回教育改革室会議  
5日~6日(研修) 教育ワークショップ(奈井江)  
9日 (会議) 第147回全学教育委員会小委員会  
17日 (会議) 入学者選抜委員会  
19日 平成22年度AO入試・帰国子女入試学生募集要項公表  
20日 (行事) 教育学部オープンキャンパス  
25日 (会議) 平成21年度第2回センター予算施設委員会  
(会議) 平成21年度第3回教育改革室会議  
26日 (会議) 第3回総合教育部教育課程等編成WG  
28日 (説明会) 外国人留学生のための進学説明会(東京)  
30日 (説明会) 新潟南高校主催進学相談会(新潟)  
(会議) 高等教育開発研究委員会

### 7月

- 2日~30日(行事) 北海道大学公開講座(計8回)  
4日 (行事) 第1回キャンパスツアー  
10日 平成22年度入学者選抜要項公表  
11日 (説明会) 全国国公立・有名私大相談会2009(東京)  
12日 (説明会) 外国人留学生のための進学説明会(大阪)  
14日 平成23年度以降学部入試学生募集概要公表  
16日 (説明会) 北海道大学入試説明会(高校教諭対象)  
19日 (説明会) 全国国公立・有名私大相談会2009(大阪)  
20日 (説明会) 全国国公立・有名私大相談会2009(名古屋)  
21日 (会議) 第148回全学教育委員会小委員会  
24日 (会議) 平成21年度第2回センター運営委員会  
(会議) 第77回全学教育委員会  
(説明会) 高松高等予備校主催進学相談会(高松)  
25日 (説明会) 外国人就学・留学生のための外国人進学相談会(仙台)  
26日 (説明会) 全国国公立・有名私大相談会2009(横浜)  
30日~31日(国際シンポジウム) プロフェッショナルディベ  
ロップメントの諸相

### 8月

- 1日 (行事) オープンキャンパス(函館キャンパス)  
1日 (行事) 北大プレオープンキャンパス2009  
2日~4日(行事) オープンキャンパス(札幌キャンパス)  
4日 (会議) 平成21年度第4回教育改革室会議  
21日 (訪問) 富良野高校  
30日 (行事) 北大セミナー in 函館

## 行事予定 SCHEDULE, October - December

	【日(曜日)】	【行事】
10月	1(木)	第2学期授業開始日
	1(木)~7(水)	抽選科目の申込期間
	9(金)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日
	13(火)~19(月)	平成18~21年度入学者履修届 Web 入力
	13(火)~14(水)	平成17年度以前入学者履修届受付
11月	22(日)	AO入試・帰国子女特別選抜
12月	9(水)~11(金)	履修登録した科目の取消し受付
	28(月)~1月4日(月)	冬季休業日

**センターニュース 2009, No. 80 目次**

<p>&lt;巻頭言&gt; 入学者選抜研究部長をお引受けして 喜多村 昇 ..... 1</p> <p>カナダ・ダルハウジー大学と大学間交流協定を締結 ..... 3</p> <p>国際シンポジウム「プロフェッショナル・ディベロップメントの諸相」を開催 ..... 4</p> <p>国際シンポジウム・ワークショップに参加して ～アカデミックライティングの新展開～ 瀬名波 栄潤 ..... 6</p> <p>英語による授業に関するFDプロジェクト..... 7</p> <p>マイクロティーチング・ワークショップ参加レポート ..... 8</p> <p>「革命」進行中のオランダから ～ライデン大学FDプログラムに参加して～ ..... 10</p> <p>全学教育委員会報告（第77回） ..... 11</p> <p>平成20年度初習外国語のCALL授業に関する報告 ..... 12</p> <p>全学教育履修者数一覧 ..... 14</p> <p>全学教育の科目責任者からひとこと 想像力と創造性をきっと磨いてくれるはず！ 安達 真由美 ..... 16</p>	<p>特任研究員（旧外国人研究員）にオーメット氏 ..... 16</p> <p>北海道大学教育倫理綱領および科学者の行動規範の制定 ..... 17</p> <p>戦略的大学連携支援プログラムに採択 《相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出 —国公立4大学IRネットワーク—》 ..... 18</p> <p>教育改善を目指すFD・SDネットワークの構築 ～IDE大学セミナー開催される～ ..... 19</p> <p>授業を変えるe-ラーニング ～第14回北大教育ワークショップ～ ..... 20</p> <p>新しい研修の形を目指して ～次世代FD研究会ワークショップ～ ..... 23</p> <p>生涯学習フォーラム開催される ..... 26</p> <p>AO入試の新たな展開にむけて ～研究会を開催～ ..... 26</p> <p>センター日誌・行事予定 ..... 27</p> <p>目次・編集後記 ..... 28</p>
---	---

**編集後記**

本号では、6月～9月にかけて本センターが主催・共催したFD関連の活動を紹介しています。国際シンポジウム、次世代FD研究会ワークショップ、ライデン大学FD、文学研究科向け英語による授業に関するFDの経験や議論は、本学における今後のFDプログラムの開発に関して新たな視点や可能性を示しています。北海道地区FD・SD推進協議会が発足し、地域及び国際的なネットワークを活用しつつFDを企画実行できる環境が整いました。また、国公立4大学IRネットワーク事業では、学生調査が計画されており、授業アンケートの結果も含めて、FDの効果と教育の質を考えるための資料が蓄積されます。本学におけるFD活動は、着実に新たな段階に入っていることを実感しています。(碧)

**センターニュース 第80号**

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)  
 発行日：2009年9月30日  
 発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター  
 〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目  
 電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854  
 編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅・安藤厚  
 木村純・川初清典・亀野淳・三上直之  
 山岸みどり・鈴木誠・池田文人  
 ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで  
 電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521  
 インターネット ホームページ：  
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>